武家の古都 鎌倉塾

平成24年度　春季講座　第3回要旨

『中世鎌倉における禅宗の輸入』

講師：村井　章介さん（東京大学大学院教授）
とき：平成24年6月23日（土）　ところ：鎌倉芸術館

◎日本渡来当初の禅宗

鎌倉時代の日本と最も関係の深かった国は中国であったが、その交流に最も重要な役割を果たしたのは禅僧であった。宗教にとどまらず建築や文学などさまざまな領域にまたがる文化をも日本にもたらした。

日本に最初に禅宗をもたらした栄西は帰国後、博多に「扶桑最初禅窟」として聖福寺を開き、その後1200年に鎌倉で最初の禅宗寺院寿福寺を開く。栄西を鎌倉に招いたのは北条政子であり、鎌倉で仏教の伝道をさせた。

しかしその頃はまだ禅宗は宗派とは認識されておらず、栄西は密教の僧侶として招かれ、儀式や祈祷などを行っている。禅の要素はあらゆる宗派の中にあり、その中心的な身体の使い方が座禅であった。中国では禅宗は座禅を中心とする宗派として確立していたが、日本に入ってきた時点ではまだ宗派とは捉えられておらず、禅という考え方を持ち込んだに過ぎない。

◎政治権力と結びついた禅宗

その後、1246年に中国の禅僧蘭溪道隆が来日し、宗派として確立された禅宗が持ち込まれた。執権北条時頼は、来日していた蘭溪道隆に注目し鎌倉に呼び寄せ、1253年に日本における最初の本格的な禅宗寺院である建長寺を開かせた。

栄西も蘭溪道隆も、京都よりも先に鎌倉に来て活躍している。鎌倉五山と京都五山では、鎌倉の方が成立が早い。つまり禅宗に関する限り、まず鎌倉に定着し、その後に京都の天皇を中心とする支配層に受け入れられるようになった、という経緯が読み取れる。新しい国家権力として登場した鎌倉幕府は、それまで日本になかった新しい禅宗という宗派をバックボーンにしようとした。一方、禅宗の側としても、旧仏教が根付いている京都に入り込むことが難しいため、京都と並ぶ政治権力の中心地・鎌倉に注目することになったと言える。

◎北条氏と渡来僧

北条時頼は自ら禅宗信仰に深く帰依し、渡来僧・兀庵普寧（ごったんふねい）の指導のもと、実際に悟りを開いたとされる。その瞬間を記録した史料の中にある兀庵と時頼の問答には、儒教で用いられる語句が頻繁に使われていた。この時代の中国の禅宗は、政治にあたる階級の必須の教養として存在しており、儒教的な要素が多分に含まれていた。死後の世界における安楽を目的とすることが仏教の本質であるが、さらに為政者の要求に応える特徴を持っていたのが禅宗であり、北条氏はむしろその点に注目したと思われる。

時頼が悟りを開いたことは、鎌倉幕府と禅宗との関係がより緊密になったことを示し、以後、北条氏に呼ばれて鎌倉に来る渡来僧が相次ぐ。蘭溪道隆や兀庵普寧以外にも多数の禅僧が招かれており、13世紀の半ばからの約100年間に、史料に残っているだけで30人以上が数えられる。また同じ時期、中国へ渡航した日本の禅僧たちの数も二百数十名に及んだ。相互に往来があったことが、この時期の大きな特徴である。

◎鎌倉と中国をつなぐ禅宗世界

時頼の次の執権・時宗も禅宗を深く信仰した。2人の僧侶を使者として中国に赴かせ、日本に招いた禅僧が無学祖元であった。時頼の命日に作った「普説」という文章には、無学が日本に来ることになった経緯が書かれている。そのなかに当時日本から中国へ渡った渡海僧も、中国から日本へ渡った渡来僧も多く存在していたことが書かれており、この時期すでに頻繁な往来があったことがわかる。

一方、中国へ渡った渡海僧のなかで一番詳しい記録を残しているのが、鎌倉出身の禅僧中巌円月である。

中巌自身が書いた履歴書である「自歴譜」は、当時の知識人であった僧侶がどのような経緯で修行を積み成長していったのかを逐一追える貴重な材料である。そこからは、当時の鎌倉では渡来僧や渡海僧に教えを請うことが非常に容易であったことがうかがえる。中世の鎌倉において、中国から禅宗がどのように受容され、その中で日本人の禅僧たちがどう成長し、中国への目を開かれていったのかを示す典型的な事例である。